

8-11		主題	シェーマ図のショートステイでの活用	
シェーマ		副題	日々、確認が必要となるショートステイで、シェーマは有効活用できるか？	
ケアプラン仕組み作り				
研究期間	3ヶ月	事業所	うきま幸朋苑 短期入所生活介護	
発表者：川崎 初美（かわさき はつみ）				
電 話	03-5914-1331	メール	kawasaki-h@kohoen.jp	
FAX	03-5914-1350	URL	http://www.kohoen.jp	

今回発表の事業所やサービスの紹介	東京都北区で、初の完全個室ユニット型特養として5年目を迎える。保育園・就労支援施設を併設する複合施設であり、世代間交流やイベント、ボランティアの方々も定着しつつある。浮間庚申通り商店会に入会し・赤羽消防団第7分団に団員を入会させるなど、地域交流も深めている。ショートは、定員19名、アクティビティー活動の定着化と個室でゆったりと過ごせる空間が特徴です。
------------------	--

《研究前の状況と課題》 当事業所のショートステイは、19床あり稼働率が100%前後を保っている。月の延べ利用者数は、590人前後、リピート率が95%であるため、月に100名の方が再利用されている。この現状を踏まえると、ショートステイでも、ご家族のレスパイトケアまたはお預かりのケアに留まらず、個々のニーズに応じたケアプランの実行や、種々のアクティビティー活動の充実化が望まれる。しかしながら、現状では、ケアプラン内容も乏しく、家族からの要望が中心の体調管理、活動維持のケアとなっている。職員は日々、食事・入浴・排泄の3大ケアに追われ、ゆとりの時間を作りだす所から開始しなければならない。ただ、職場を支えている職員は、個別ケアへの意識が高く、チームとして動いたり、情報をまとめる手段に乏しい状態である。	《研究の目標と期待する成果》 時間がなく、日々の仕事に追われているという雰囲気の中では、大きく変革していく事は難しい。今回の研究では、現状の雰囲気がどのように改革の雰囲気に変化していったかを示していきたい。そのために必要となった道具（ケアプランに関する一連の書類）を整備し、仕組みとして確立していくことを目標とする。 期待する成果としては、ケアプランに対する関心を高く持つこと。ケアプランが基盤となり、様々なアクティビティー活動や、リスク管理に繋がっていることへの理解が進むことを目指していきます。ただの流れ作業ではなく、関わる時間が少なくても、しっかりした情報が頭に入っていれば、個々への質の高い関わり方ができる。という自信に繋がっていく職員が出ることを期待しています。
--	---

《具体的な取り組みの内容》

毎月、約110名前後の、ご利用者がいますので、50音順にデータベースを作成します。そのデータを基にして、各月の予約段階で（当事業所では2ヶ月前のFAX申込）、ある程度のケアプランを全員分作成します。そして、各月ごとに作成確認の一覧表でチェックし、漏れを防ぎます。管理者と相談員の連携にてダブルチェックを行ないます。作成したケアプランの中からメインとなる大事にしたい3項目を取り出して、ご利用されるごとに連絡ノート・体調管理ノートなどを介して最新の情報に更新し、ご本人・ご家族からの要望も更新していきます。各職員に重要ポイントを周知するために、昨年に発表したシェーマを変形させて活用します（図参照）周知度を測るために、具体的なアクティビティ活動の起案や、個々に応じた伝達ミーティングの記録などで、現状把握に努めます。

シェーマの標題・主要項目について

個別性
本人の思い

健康維持
疾病予防
の関与

独特な関わり
医療・認知・抑制

《取り組みの結果と評価》

詳細な情報を、重点3項目に絞り、さらにシェーマにて、疾病予防―特殊な関わり―個人の思いを汲んだケアの割合がわかるように表示した。フロアの現状把握と同時に、職員のアセスメントへの関心を高め、仕事に流されるのではなく、ご利用者一人ひとりと、しっかり向き合うことの大切さをあらためて実感することが出来た。

《まとめ》

1. ショートケアプランのデータ化
2. 管理者と相談員のダブルチェック化
3. 1ヶ月サイクル内でのシステム化
4. シェーマ活用による情報共有化
5. 事業所の現状に対する振り返り
6. 新たな活動への起案と実践
7. 職員の意識改革と行動変容
8. ご利用者ひとりひとりから教わる姿勢

《参考文献》

【書籍名】見える化 強い企業をつくる「見える」仕組み

【著者・出版社】遠藤 功 東洋経済新報社

【書籍名】トヨタ方式で成功する企業改革

【著者・出版社】正木英昭 秀和システム

《提案と発信》

昨年に引き続き、シェーマの有効活用を模索してみた。1枚の図に表現される内容は、インパクトがあり記憶に残り易い。さらに、自分で作成してみると、何を中心に置くべきか？何を大切にしていけばいいのか？その方に向き合う時間が膨大に生まれる。各施設にて、人材育成や同職種に限らず、多職種連携にも役立つ道具として、ぜひ活用していただきたい。

【メモ欄】